

2013 年が始まった、今年は 13、オレだけの個人的な話で申し訳ないが、何でもかんでも 13 という数字を書く、何時も書く、何処にでも書く、これは 1 年間忘れない、平成 25 年というのも忘れてはいけないと思うが自信が無い、ええと今年は何でしたかとよく呟いている。この 13 年はオレ何て言おうと寝る前に考えた“食う、寝る、描く、走る、で日々暮らしている”と言おう、そう決めた。

この“えかきのぼやき”日記というのか雑記というのかそんな事はどうでもいい事だけれども、もう 1 年間以上続けている、よくもまあ 1 年を超えたものだ和我ながら感心自賛の感。若い頃から日記を書こうとして、書き続けることに慣れて正月になるとペン（今はもっぱらエンピツ）を持った事がそれこそ何度もあった、何度というのも恥ずかしいぐらい何度もあった。三日坊主という言葉で地獄のように 1 月 1 日と 2 回目そして 3 回目で終わってしまったこともあった。

我ながら驚き感動している事は、これを書くことに依って、文章にする、言葉にすることに依って、今まであやふやだった自分の想い、考えが決まってきたり、はっきりしたり、変わってきたりと徐々に微妙に蛇行しながら固まってきたと感じている。自分で自分がはっきり言える、表現できるついでに人の話も聞けるといい事が続く。想いや考えを言葉にすることに依って自分のもの自己のものになってゆくのだと、それは本当に嬉しいかぎりだ。

“えかきのぼやき”何を書こう、どう書こうと悩んだ時もあった。面白い本を読んだ、これは知らなかった、旅に出た、山に登ったなどと色々な感動を書いた、面白い事があった、知らない事を発見したということも書いたが、日々そう毎日、面白いこと感動することがあるわけではない。人さまの日記を見ると、日誌風にその日にあったことを細かく書いている人、天候、景色風景、食事と特定のものを書き綴っている人と様々だ。

オレはまだまだ 1 年坊主、何時まで続くか、何を書いてゆくか、どう想いが考え方が変わってゆくか、自分の事ながら分からないが、とにかくしばらくは続けるぞ。

文章を書くために、人の文章を読むようになった、気にいった文章なら二度も三度も読み返し何を言ってるどう言ってるとう理解しようとするようになった。図書館で本を借りるが、半月間 8 冊貸してくれるので普段読まない本、興味のない本を借りてみると以外とその中に琴線に触れるものがある、驚くものがある、これはもうけものだ、図書館のありがたさだ。2.3 年前から新聞は読まない、TV はほとんど見ない、という人になった。

これを知りたい、調べたいという時はインターネットの検索がいい。この検索機構はお世話になりっぱなし、難しいことも、何時何処で何者がという事件、自性、現在進行中のことも過去のことも、本当にこんなつまらないことが載っているのか、こんなことまで載っているのか、あらゆる事が、うまく探し当てたら答えが出てくる。なんでもかんでも教えてくれるという優れものだ。

図版は玄関の扉に毎年描いている戯画。今年はしめ縄を買いそびれたので干支の絵をやめ、しめ縄を絵に描いた。ダンボールに描いた。

先日知人の展覧会を観に行ったら、彼女、縁者の建具屋さんに作ってもらったという額、本人の手作り額、全部の絵を同じようなスタイルで額装して飾っていた。口の悪い奴が「額がいい、額が素晴らしい、綺麗だ、気に入っている」というので観に行ったら。とはいえ額より先に絵に目がいき「おお、なかなか上手く纏めている、なんだか苦労しているけれど、未完の部分を残しているのがいい・・・」と絵を観て額の事は忘れていたが、そっと横を見てこれが噂の額かと、改めてそれをしみじみ見るとこれもまたピシリと快く決まっている、恰好がいい、額がいいとほめる奴がいるのもうなずけると思った。

額と絵の関係は、人と服の関係、花と花器の関係、料理と器の関係と、どれをとってもそうだと違うとも思える。さあ絵が出来上がりました、当然のように額に入れる人、お気に入りの額が決まっただけで同じスタイルの額を常備している人、あたふたと額屋に駆けこんであれやこれやの文句注文を付け時間をかけて額を作る人、額など本当は要らないが客が欲しがるので何でもいい、在ればいい、絵がいいのだからと素っ気なく嘯く人、と絵描きは様々だ。近所に大雅堂という額屋がある。大阪の老舗に居た人がやっている店で、品物の質はいい、いい額を作っている。その野田さんが時々アトリエを訪れてくれる。ほとんど買わないがというより買えないので恐縮しているが、いろんな額を見せてもらったり話を聞かせてもらったりしている。その中にオレのお気に入りがあるのだけれど、絵が売れるようになったら注文するぞ。

3か月後の3月下旬にオレの展覧会が決まった、ならばオレも額を作ってみるかと思ったのが1カ月前。今まで手作り額は何点か作った、と言っても展覧会に出す20.30点全部を額装したのではなく、2.3点作って、売れると決まったものだけ額装してお渡しした。昔の油絵は分厚く重くガラスが入りと決まっていたが、現代絵画の人たちはそれぞれ工夫して、全く額なしの人、キャンバスのままの人、同じキャンバスまでも釘止めを裏側でしている人、キャンバスままの方法も横面に絵の具が垂れるまま絵の具で汚れるままを絵の一部として見せている人、布か紙を張り付けて簡単目張りをしている人、昔のような額だけれども現代風に洒落た工夫をしている人、素朴に木の板を打ちつけている人と様々。オレが今一番お気に入りのスタイルは、絵と板の間に1センチの隙間を空けたお盆スタイルの額なのだが、それを作るのにネックになっているのが木を45度に真っすぐ切る技術。オレは木を真っすぐ切れない、まして45度になど、それらの歪んだ切り口の木を組み合わせるととんでもなく不細工で隙間が空いて捻じれてしまう。「木を45度にうまく切れる、そんな金具が売っているよ」という話を聞いて「木を45度に切る」とパソコンの検索欄に書いてみた。皆さん親切に教えてくれるが帯に短し襷に長しの諺道り、それらの金具、高すぎるか、オレの鋸には合わない。四苦八苦して45度に切るための道具を作ってみて、試したがこれなら昔の下手なまま道具が無くても同じ、もっと金具の隙間を狭くして、此処にも金具が要るなどと工夫改良の結果、何とか許せる、なんとかものになるという道具が出来た。次に「額を作る」と検索欄に書いてみたら写真入りで最初の段階から丁寧に順序立てて書いてある。45度に切った木を4本、糊を付けて組み合わせバンドで締めつけると書いてある。アトリエに在るキャンバス布の切れ端をバンドにして、アトリエに散らかっている木っ端で締めつけて1日経つと今まで出来なかった難しかった額の元が原型が出来た。次は裏蓋のベニヤ板を貼る、鉋、やすり、ペーパーで凸凹の補修調整をする、全体にボンドを塗る、白い色黒い色の順に塗装、金具の取り付け、黄袋作りと行程はたくさん残っているが、これらの作業はなんとかなる、「簡単なものだ」と現在5店10点と進行中、この手作り額、乞うご期待。

図版は、定点観測。床に手作り額をならべた。

「あと何回来られるかな」とオレ、ベッドの上で感慨深げに呟くと「3カ月に一回で、あと3年出来ますよ」と看護婦さんが事もなげに笑って答えた。60歳から65歳までに献血経験があれば、70歳まで献血可能だがそれ以上は出来ないそうだ。オレは多分年一回しか来ないだろうから精々3回かと思うと、もう要らないよと言われる歳かと淋しく心細くなるが、血圧を測りながら医者が「その歳まで健康で献血に来れるなんて素晴らしいことですよ」と言われると、嬉しいが後3年は早いもんだとも・・・。

二十歳代に友人のS君が胃潰瘍の手術をするので献血をしてくれと頼まれ、大阪市内の赤十字病院で「S君の手術輸血用」と言って血を採ってもらったのが初めての献血経験。後日聞くとオレの血液は確実に彼に輸血されたということだった。病気が治って飲んだ席で「お前はオレの分身だ」なんてザレていたが最近では会う機会も無くどうしているのかは知らない。10年ぐらい前までは相変わらず元気に飲んで話していると聞いていた。この話最近まではと言おうとして、10年ぐらい前の話かとふと我に返り、我々のいう最近とは10年前まで入っているのか、10年前も最近かと啞然とするも、10年前がつい最近つい先日の感が否めない。S君、手術の後はさすがに身体を気遣い養生していたようだが、すぐに酒を飲み始め、酔うと多弁、饒舌な人だった。話の内容がオレと噛み合わず、理解できない人だとお互いに思っていたのかもしれない。

献血カードを見ると今回で17回目だ。阪急電車茨木駅が改装され30年、40年経つが、30、40年というときさすがにオレも相当前の事という、とは余談だが、3階建ての立派な駅になり、1,2階はお店が並び、3階が電車のホーム、そこをほとんど連日利用していた。その1階に多分最初から献血センターがあった様な、定かではないが、何時も何人かの人が出入りを斜めに見て通り過ぎていた。50歳の頃のいつの日か思いきって入ってみた。「400ですか成分ですか、400ですと30分以内、成分ですと1時間ぐらい」と聞き400mlを選んだ。以来ずっと400mlを続けている。

献血をして何日か後に血液検査の結果が届くのが毎回楽しみになった。50歳代はアルコール摂取量が多く、外にも飲みに出かけ、アトリエでも夜になると絵を描きながら連日飲んでいて、ほとんど毎日飲んでいて、1杯が2杯、3、4と飛んで4杯5杯と飲んでいて、最初はなんともなかった検査の数字が、肝臓、脂肪の数値が毎年徐々に上がりだした。これではいけないと献血の前日は飲酒を控える、運動量を増やすとかの対策を練ったが、飲酒の絶対量が多すぎた、飲みすぎた。身体がだるい、身体が重い、元気が出ないと思いだしたのが3、4年ぐらい前から、それ以来自然と酒の量が減っていったが、アルコール摂取量が少なくなったからと言って体調が急には戻らない、すぐに元気になりはしないと思いつつ時が経って、ふとだるさ、重さが無くなっている自分に気付く、やや元気になってきていると、大酒を飲まなくなった。ただ年相応に血圧が上がったり健康を害する数字が出始めたり。「次から次に病が出てきます」と近所のお姉さんが言うようにならないように気をつけねば。

献血センターでもらったメモに「献血された血液は、翌日には患者さんに使用されます」とある。そんなに早く輸血されるのかと嬉しくなるが、このメモはエイズ感染者や麻薬、覚せい剤使用者の血液も翌日にはそのまま人の体内に入れられるので、そういう人たちは献血しないようにというメッセージのようだ。

もうひとつのメモには、大阪府だけで一日千人の献血が必要だと書いてある。そう言えば街のあちこちで献血を呼び掛けている姿を目にするが、足りないわけだ。

もうひとつ下らないことだけれども、10人ぐらいの看護婦さん全員ピンク色の上下パンツ姿、あの独特のキャップも無い。昔の看護婦さんは白いスカート白いストッキング白い靴だったよね「変な処をじろじろ観察するな・・・」「ハイゴメン」

休憩室に置かれたお菓子を3個いただき、コーヒー2杯もいただいた。

13-004 個展 130113

Painting solo Exhibition アメリカでは絵描きはペインター、描くことはペインティング、個展は solo Exhibition という、仕事をアトリエとは言わないでスタジオと言っていた。日本ではペンキ、ペイントは塗装関係の言葉、スタジオはカメラマンの仕事場「処変われば・・・」の言葉通りだが、オレは“えかき”とか“ペインター”とはいうが“スタジオ”とは言わず“アトリエ”と言っている。まそんな事は今のオレにとってどうでもいいかな。

画廊・シェスタ倶楽部の木村さんから年末に電話があった。「来年の3月と4月は〇〇週と〇〇週が空いているが・・・」と連絡を戴いて「それでは展覧会、この日程を予約します」と3月25日から3月30日までを個展の日程と決めた。もう何回もやっている展覧会だけれども、画廊オーナーと打ち合わせをして場所、日程が決まると頭の中がピリピリ痺れてくる、さあ展覧会だ、見せなければ、いい絵を描かなければと緊張する。それ以外にも、案内状を作って配らなければ、額は運搬は看板はと雑用も多い。

普段の日、日常生活、ライフワークなどと洒落ているのかダレているのか、描いては消し消してはまた描く、泥んこ遊び、絵の具遊びになっているのじゃないのかな、無駄な事をしているのではないのかな、そんな事を続けていても仕方が無いのではと思われる様な事を繰り返しているのかもしれない。自分の中の自分の動き自分の目、なんだかその向こうに別の動き別の目があって、その別の動き別の目が絵を描いている。その別の動き別の目は絵を描き続けなかな消えない無くならない。自分の中に自分と別の自分があって、どちらが自分なのか分からなくなっているのかな、その二つともが消えたら、自分だと思っている自分と、別だと思っている奴とが二つとも消えたら、また元の自分に戻るのかな。

そんな日々から「さあ展覧会」と決まるとひと筆ひと筆、ひと色ひと色を高校野球の投手さながら一球入魂ではないけれど「決めなければ」「創らなければ」「完成させなければ」と心の中も身体の中もそれらの命令系統が変わるのか、回線経路が切り替わるのか、不思議と絵が出来あがってくる。

此処しばらくは緑色に御執着、我が事ながら他人のように言ってみたくなるぐらい緑色を使ってきた。「岡村さん今回の展覧会は〇〇色の絵が多いね」「いやあ、〇〇色の絵の具が余っていたもので・・・」などと何時もボケた事を言っているが、緑色を使いだすと、緑色を使うことで、其処が上手くゆき、此処も上手くゆくと絵の方が緑色を要求してくる、またそこに緑色を入れるとぴたりと上手くゆく、ぴたりと決まってぴたりと完成とは、そんなにうまく絵を描いたようにうまくはいかないが、他の色を使うと、選ぶとこれはいけないと違和感、間違い感がつぶさに現れてすぐに絵の具が乾ききらないうちに布で拭い消さなければならない、削り取らなければならない。

未だに、ああでもないこうでもないと考え試し、ぼやき悩み「才能がねえ」と生きている、これはこれでなかなか面白い楽しい人生だ、完成も終わりも無い、素晴らしいと悔しさまぎれに呟いている。功成り名を遂げた周りの友人たちを横に見て、ぼやき嘯くのだが、いやいや本当にこれは楽しい。オレは今年は、「食う・寝る・走る・描く」だ。

毎日使っている絵の具の数は少ない、人と比べて少ない方だと思う。白と黒あとは10色ぐらい。白と黒はそれぞれ淡いものと濃いもの二つずつ、これは要る、ほかの人は要らないかもしれないけれど濃淡の白と黒はオレは要る。黄色、青色、緑色、赤色などそれぞれ2,3色ずつ、あまり使わない色を入れても20色ぐらいしかもっていない、用意していない。画材屋でいい色だと見つけて買って見たものの、一度使ったきり何年も使わない絵の具もある。その反対に、今の緑色のように何度も何度も絵の具の蓋を開けている絵具もある、そればかり使う絵の具がある。

図版はスケッチ。Dwaring ドローイングかな。

13-005 巡礼 160113

おお、おお、これはまた、知らない事、知らない話。へえ、ヨーロッパのど真ん中にこんな風習があったのか、巡礼という風習が長い間続けられていたとは驚いた。オレはほんと知らない事が多いね。

仲間に永井君という友人がいる。東大卒、一流商社マンとエリートを絵に描いたような人生かな。その彼から分厚い封筒が来た。何年か前にも送ってくれて開くと四国八十八カ所遍路日誌だったが、今回はより大きくより厚い。開けてみると「サンティアゴ巡礼日記」と題された一冊の本が入っていた。「サンチャゴ」は聞いた事があるけれど、正にそのサンチャゴのことだった。へえとパラパラ拾い読み、ほほほ、面白そうだ

Wikipedi とその他。

サンティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼路（じゅんれいろ）キリスト教の聖地であるスペイン・ガリシア州のサンティアゴ・デ・コンポステーラへの巡礼の道。おもにフランス各地からピレネー山脈を経由してスペイン北部を通る道を指す。

聖ヤコブ（スペイン語でサンティアゴ）の遺骨があるとされ、ローマ、エルサレムと並んでキリスト教の三大巡礼地と数えられる。

1000 年以上の歴史を持つ聖地への道は、今も年間 10 万人もの巡礼者がいる。

全長 800 キロの長い道のり。最初に巡礼事務所がありそこで巡礼の登録を済ませる。宿泊所は「アルゲルベ」という巡礼宿が各所に在り、宿泊代金も 1000 円ぐらいと安い。日本人のオレと同じように山登りを常に行っているおっさん「日本の山小屋よりよっぽど待遇も環境もいい」と日本の山小屋の事をぼやいていたが、この事はオレもぼやきたいがそれは又の機会に。

日本人のサンティアゴ巡礼紀行文の中に、四国の八十八カ所遍路を終えた人が何人かいて、四国とサンティアゴをそれぞれ比較しているのも面白い。

サンティアゴ巡礼日記を読み始めた、ほぼ 30 日間毎日 20 キロ 30 キロの徒歩の旅、朝の起床、朝食、出発、歩いている時に何かを見つけ、何処かで休憩して飲食の詳細、風景の詳細、気候の詳細、そして次に別の場所に到着、目的地の宿泊所についてシャワー、洗濯、晩飯、道であった人、同宿の人との話、その人たちとの食事と毎日毎日書かれている。食べ物飲み物の事、気候風景の事、名所旧跡の事、道で会った現地の人、同じように巡礼している人との会話を言葉が通じるままに、通じないままに淡々と日々書いている。前に戴いた四国遍路のものに比べ、読みやすく本も豪華で綺麗、前と同じように彼がその場で描いたスケッチが散りばめられている、いいじゃないか、素晴らしい、オレも行けたら行きたい、と思った。このような旅はしてみたい 30 日間歩きっぱなし、安宿やらテント泊、食事は食材を買ってアウトドア用コンロで調理する、レストランで食べる、居酒屋で飲む、なんて楽しそう。今まで車に荷を積んで移動の事ばかり考えていたが、1000 円というような安価な宿があれば、リュックに山に行くのと同じような荷を詰めて歩けるな、歩けるのではないのかな、雨の日は辛いけど宿があれば解決しそう、30 日間も歩けるかな、恐らく体力気力は間に合いそう・・・がはは行きたいね。

「お前の絵を買って会社に飾っていたら、来客がその絵を見て、お前の会社は自転車操業かと言われたぞ」半年前仲間何人かと飲んでいる時彼は酩酊して吠えていた。彼は若い頃から自転車の絵「サイクリングやロー」を含めて何点

かを求めてくれた。「文句いい」の「ぼやき」の口は悪いがいい男だ、巡礼の旅を次々続けるなんて素晴らしい、次はどこに行くのかな、リクエストなどしたら怒るだろうけど「シルクロード」「南アメリカ太平洋沿いに南下」「チベット縦断」なんて面白そう。

図版は人が歩く絵。20歳の頃東京ブリジストン美術館に青木繁の「海の幸」を何度も見て憧れて同じような絵を何度も描いた。

13-006 巡礼Ⅱ 200113

先日の“サンティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼路”の話以来、巡礼となんだらうと考えていました。嘗て画像で見た五体投地の姿が強く印象に残っていたので、あれも巡礼なのかなと調べるとチベット仏教の事が出てきました。

チベットの聖なる巡礼：ダライ・ラマ法王日本代表部事務所、その他より。

まだ残雪の残る6月、チベット北部人里離れた山岳地帯から、ヤク飼いの24歳ジョアマ（女性）と従兄弟3人が、人生で最も壮大な巡礼の旅に出発した。特別の儀式も無く彼女等は「ただ出発しただけ」とジョアマは思い出す。

4人はマントラを唱えながら手を天にあげ膝を地につけ湿った地にふれ伏すように身体を前に投げ出す。それから立ちあがり小さな三つの手順の後同じような動作を繰り返す。5か月以上彼女等はこのように毎日文字通り這うようにラサとそこに在る聖なる寺院に向かって行く。ゆっくりと標高4200Mの世界で最も厳しい地域を160キロ以上も進んで11月初旬にラサに着いた。「人生の夢だった」とジョアマ。

別のグループは「一日の終わりには身体じゅうが痛い。しかしラサにたどり着いて寺院に詣でる事が出来ればとても素晴らしいだろう」18歳から60歳までの5人が五体投地を行い、他の3人が手伝いとしてテント・食料を積んだ台車を引いていく。

道中施しを受けながら進んで行くグループもある。

膝を守るための革製のエプロンと、腕を守るための厚い手袋を付けている多くの巡礼者たちは、仏教經典に精通しているわけではないが、ただ信じる事、ただ感じる事を知っている。「なぜこんな困難な巡礼に出る」と尋ねると「来世がよくなればと思ってこんな事をしている」

チベットは今、中華人民共和国・西藏（チベット）自治区だ。有名なダライ・ラマは亡命してそこには居ない。という複雑な話は次回に。

巡礼とは元来宗教の言葉で、各宗教の聖地と決められた所に向かって進んで行く、歩いて行く、苦難を乗り越え病をおしてまでも行く、全財産を擲（なげう）って行く、その行く行為、その日々の過程、その日々の苦難が、信じる宗教の真髓との対話を、通じあう気持ちを高め深めてゆく。またその道中には、巡礼をする人その行為をする人に対して応援、援助、救護をすることで、巡礼をする人と同じように宗教との対話、通じあう気持ちを高め深めてゆくというようにたくさんの人が関わって成り立っているようだ。

友人のキヌちゃんは毎年大峰奥駈道を歩き続けている。何日かけて奈良の吉野から新宮近くまで歩くようだ。これも巡礼かな、修業かな。

オレは山に入って歩く、登る。「山で何を考えますか、山に登って何を想いますか」と問われたら、「何も考えない、何も想わない」と今は答える。山に入って、地面があって、土が岩が、木の根が幹が葉が草がある、前に向かって歩くだけ進むだけで足の運びが楽しい、身体の揺れが嬉しい、流れる汗が心地よい、日が暮れると土の上に寝る。と言

えばそれこそ殉教者のように聞こえるが、都会で日々近代生活を過ごし「山にでも行くか」とやってくるオレには、山で生活する人、修業する人、巡礼をする人とは気持ちも精神も大きく違っているかもしれない。もしかしてそのような行為をする人、苦難、苦行をする人もその行為、そうすることを楽しみ喜びとしているのではないのかな、そう、人生そうでなくっちゃ、全て喜び楽しみでなくっちゃ。苦難、苦行、修業などとは見ている人、傍にいた人が言うことで、それをしている人は、何も考えず、何も想わず、その時を楽しんで喜んでその時を過ごす、それが本当だ、最高だ、素晴らしいことだと思わないとあかんぞとオレは思う。自らが難行苦行という輩は、それで儲けようとしている輩かもね。

13-007 パソコンがおかしい 260113

考えてみればパソコンって不思議な機械だね。これを使っている人は「こんな便利なものがあるものか、道具も場所も要らないのに何でも作れる、何でも生み出せる、今やこれが無かったら夜も日も明けないね」そう宣（のたま）う人が今はたくさんいる中にそれに反して、パソコンを使わない人、使えない人、使いたいとは思わない人が何人も居る。尤も携帯電話に関しては「いらん」と宣言しているのはオレぐらいだろうとは余談だが、パソコン不要を「いらん」を宣言している人はパソコンに向かっていて人を見て「彼らは、連中は何を言っているのだ、何を騒いでいるのだ、所詮デジタル世界の話、所詮薄っぺらな軽薄世界、関係持ちたくないねえ」と言い棄て感心の無い“ただの箱”かもしれない。

「え、メールの受信ができない、なんで・・・」しばらく戸惑って、そのうち解決するだろうと、電源を落としてみたり、再起動をしたり、2時間3時そのまま置いてみたが一向に解決しない。これを試してあれを試して、先日来画像の事でパソコン氏から何度も注文・注意をされていたがそれが関係するのかと考えながら、普段気にもせず使っている装置が動かない。今日はこれにかかりきりで1時間2時間と過ぎていく。焦る、イライラの焦燥感が身体じゅうに満ちてくる「嫌だねえ」とそれでもまだ試している。こういう時はオレの中の精神が思考回路が脳の動きが、不条理の世界、迷宮の世界を楽しむようにふらりふらりと回転蛇行していく。グズグズ、ダラダラ思いめぐらし解決よりも不安定を、成就よりも回り道を寄り道を、ミミズのように這いずりまわり、ゆっくり動き前あっているのかもしれない。

一日が過ぎ自力で解決できない、誰かに聞こう、誰かに教えてもらおうと思いながら昨日来ひっくり返し調べた重要書類の中に「設定技術の事は〇〇番に」書いてある処を見た。「ハイ電話ありがとうございます」なんとすぐに女性の声「ハイ〇〇を押して、〇〇の処に重要書類に書かれた〇〇を入れて、次に・・・」とやさしく女性の声が導いてくれる。10年前はそういう電話、サポートの電話は混んでいて繋がらないものだと思っていたが、最近はパソコン難民の救済サポート体制が行き届いているのか、電話もすぐに繋がる、丁寧親切には恐縮する。なんと彼女のおかげであれだけ苦労した修繕修理があっさり解決、ただ完全回復、完全復旧ではなく、別の筋で繋がったが、一応どんどん来ているメール情報の処理は出来た、筋を変える、前のものを新しい処に持ってくるという作業はあとでゆっくりと自力で出来る、とまあ解決したわけです。

コンピューターグラフィック（CGという）のプロになろうかと相当前にパソコンを買った。当時パソコンは高かった。車一台買える値段だった。結局CGのプロにはなれなかった、というより負け惜しみではないけれども、パソコンを習い始めこれは違う、これはオレのすることじゃない、CGのプロには成りたくないと思った。絵は手で描きたい、紙やらキャンパスの上に筆で描きたい、マウスやキーボードを叩いて作品を作ってゆく、モニター画面に作品を出すという作業はオレの仕事じゃない、オレのしたい事は別だと思った、そしてCGのプロになるという事とはおさらばしたがパソコン操作に多少苦労したおかげで、この歳で人並以上にパソコンは使える、画像のことも分かっているというが豪語はできない難しい事は全くわからない、今回の体（てい）たらくだ

世の中パソコンが普及して 20 年 30 年、パソコンとは計算機、計算やら分析は得意だろうと思っていたが、オレの専門分野、画像や絵やらも簡単にこなし、どんどん進んで、写真も絵もデザインも何でも任せると、パソコン氏が吠える時代になった。パソコンで、デジタルで出来ない事とは何だろうパソコン氏に不可能は何だろうと考えたが、演劇、スポーツ・・・なんてバカな事を思ったがほかに何かあるかなあ。いずれにしても、カメラマン、デザイナーという職種の人たちがどんどん廃業していった。そのうち絵も彫刻も工芸品もパソコン氏が吠え出すのでは。

3 月 25 日～30 日の個展の案内状ができた。

13-008 ラジオ体操 0113

冬はいい、冬の体育館はよく冷えている。自転車に乗って冷たい風を手や顔に受け体育館にやってきて扉を開けると暗い無人の中だけれど暖かいホワリとしている、それでも室内を何周か走って少々準備体操をしても、汗が出るどころかまだまだ上着が離せない。寒さがきついこの 2,3 日夜になると外は冷える、自転車で走るには手袋と耳当ては欠かせない。思い出したのが偏頭痛。まだ子どもが小さい頃の正月前後の寒い季節の夜に近所の飲み友達の辻君と自転車で南千里まで行った。1 時間ぐらい掛かったらどうか若さに任せて大笑いをしながら走ったと思うが、耳が痛いなど感じていた。その日は大いに飲んで朝方陽が明ける頃下り道をおっちら覚束ない足取りならぬ覚束ない自転車乗りで又大笑いしながら帰って来たのを覚えている。ところが 3 日ほどして眉間の辺りが重く痛い「なんだろう」から始まりそれから 3 カ月 4 カ月の間毎日午前 10 時頃から 2,3 時間、左右のどちらかはもう忘れたが頭の痛い日々が続いた。痛いといっても相当に痛い、我慢が出来ない、転げまわるとまではいかないけれども痛かった。最初に行った内科医院ではわからないということで別の医院を紹介され脳の輪切り写真まで撮ったが、その技師も「こんなんのどおって事無い」と頭を抱えているオレを横目に笑っていた。今の頭痛医療は知らないけれど当時頭痛とはそのようなものだったのだねえ、病気ではないのだね。内科ではわからないということで耳鼻咽喉科に行くと先生が「三叉神経が寒さで傷んだのだろうか、暖かくなったら治る、それまで辛抱、治療は無い。痛くなる前に痛み止めの薬を飲むと頭痛がましだ、痛くなってからではなく痛くなる前にだ」と言ったがその通りだった。4 月、5 月になったらその頭痛も軽くなって自然と治った。最初はびっくりした「頭痛、毎日同じ時間にやってくる偏頭痛とはロマンチックで芸術家らしい・・・」という奴も居たが辛抱出来ず病院に駆け込んだ古い思い出だ、今も冬季は、マフラーや毛糸の帽子は離せない。

話は脱線したがバドミントンの練習の前に体育館の中を走ってから準備体操をする。その準備体操はまずラジオ体操からその後にストレッチをする。ところでこのラジオ体操今は学校ではしない？させない？無くなった？今の子どもたちはラジオ体操を知らない？ラジオ体操と言えば準備体操の代名詞、それがもう古臭い、もう死語なのか、何度も言うが我々世代にとってラジオ体操と言えば準備体操の代名詞、体操そのものだった。半世紀前の学校時代、運動の時間、体操の時間、朝礼の時間何時でも人が集まればラジオ体操が付いて回った。今もおじさんお婆さんはラジオ体操の会などを催しグラウンドに集まっておられる話はよく聞く。とわいえいかにもオレはラジオ体操の鬼のように言っているが一生懸命やっていたわけではない、というより恰好だけは「イチ・ニ・サン・シ」と掛け声をかけていたが気持ちが入らずただ身体がだらだら動いていただけ、まわりの人と同じように動いていただけだったように思う。そのスタイルが今も残っていてバドミントンの練習前のラジオ体操もぶらぶらである。ストレッチという言葉聞いたのは中年になってからだ。それ以来毎日のようにやっている。身体が伸びきって調子がいい、気持ちがいい、オレはラジオ体操よりもストレッチの方が好きだ。

バドミントンを始めて3年経ったが練習日が年12回と異常に少ない。テニスをやっている友人が「それは少なすぎる、せめて週1回は練習しないと上達しない、感が薄れる、なかなか覚えられない、私は週に2回の練習日があって毎月6,7回はやっているよ」と勝ち誇った眼付にはかなわないが仕方がないか、入会した処がそのシステムで今更変われないとも思っている、始めたのが60歳を過ぎていたしゆっくりいこうか。オレの絵を教える教室の皆様もレッスンの回数が2倍3倍多くなると、習う側も目の色が変わってきて積極的にがつがつしてくる、それに釣られて教える方も気持ちが盛り上がり同じようにながつがつしてくる。趣味にやらスポーツやらそれぞれ楽しめたらいい、それぞれの方法でいい「これでないといけない」は無い。プロ、セミプロのスポーツ選手（大相撲も含めて）を育てる教育者、監督、コーチ連には「殴って叩いて押さえつけて、昔の日本の軍事教練のスタイルがいいに決まっている、そうしないと子どもは伸びない」と思っている人がまだまだ多いのにはびっくり。展覧会が近づいてきた。絵が面白い、絵が描ける、いい絵を見せるぞ。